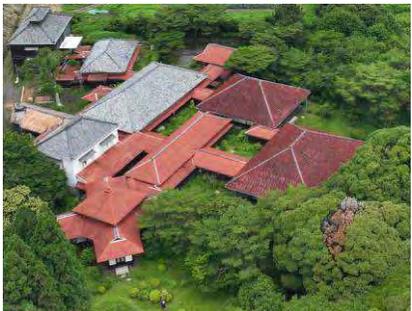




応接棟 仮設工事写真



主権：一般財団法人 野間文化財団  
協力：富士市教育委員会文化財課  
公益財団法人 文化財建造物保存技術協会  
株式会社 魚津社寺工務店

# 令和7年度 国重要文化財「古谿荘」 玄関棟ほか 8 棟建造物保存修理工事 現場公開



## 古谿荘について

古谿荘は、明治39年(1906)から42年にかけて、当時の宮内大臣であった田中光顕(みつあき)によって建てられました。その広さは敷地面積約16,000坪、建坪約520坪に及びます。建造物は、表向きの大広間棟、大広間棟をはじめ、居間棟、応接棟、八角堂などの居住部分から、管理棟や板蔵などの家政部分まで全体が完存しています。格調高い書院造りを基本とする中にも数寄屋を取り入れ、伝統的な和風意匠を取り入れながらも近代的な技術、西洋風の意匠・材料を巧みに採用するなど、和風近代建築の傑作と呼ぶにふさわしい存在です。

### 【国重要文化財指定概要】

#### 指定内容

建物名称	構造	建築面積
玄関棟	木造、スレート葺	55.89㎡
応接棟 (台所棟含む)	木造、棧瓦葺	453.48㎡
大広間棟	木造、鉄板葺	175.43㎡
居間棟	木造、鉄板葺	251.19㎡
八角堂	木造、スレート葺	207.95㎡
管理棟	木造、スレート葺	128.63㎡
内蔵	木造、棧瓦葺	147.43㎡
板蔵	土蔵造、2階建、棧瓦葺	164.95㎡
板蔵	木造、3階建、棧瓦葺	129.13㎡
建築総面積		1,714.08㎡(約520坪)

- 指定名称  
古谿荘(こけいそう) 9棟
- 指定年月日  
平成17年(2005)12月27日
- 指定番号  
建第2476号
- 所在地  
静岡県富士市岩淵233番地
- 所有者  
一般財団法人 野間文化財団

附・平面図 2枚(大正5年、大正8年)  
宅地 18,838.74㎡(約5,700坪)  
(門、守衛所、石造橋、石造擁壁を含む)

## 古谿荘 案内図



### 応接棟

客人を受け入れる応接空間。ドイツ製の分電盤が設置されている。



### 板蔵

鉄板で覆われた3階建ての蔵。内部は漆喰塗(しっくいぬり)になっている。



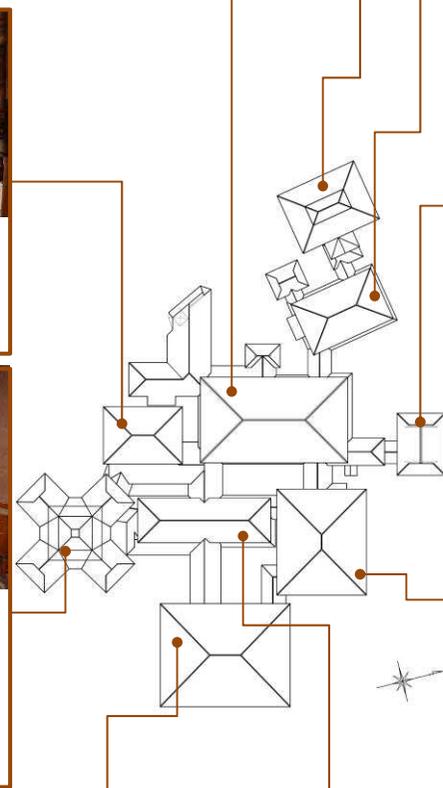
### 管理棟

管理や事務作業を行う建物。各棟から受信できる呼び鈴盤がある。



### 内蔵

建物と隣接する2階建ての土蔵。緩やかな大階段がある。



### 玄関棟

軒の高い車寄から6畳ほどの玄関が続く。廊下は舟底天井で軒裏は苧殻(おがら)張り。



### 八角堂

八角形の建物内に寝室や書斎が並ぶ。貴重な金唐紙を壁紙に使用し、輸入ガラス・電球などが使われている。



### 大広間棟

二つの床の間が左右対称に並ぶ。通称「富士見の間」と呼ばれている。



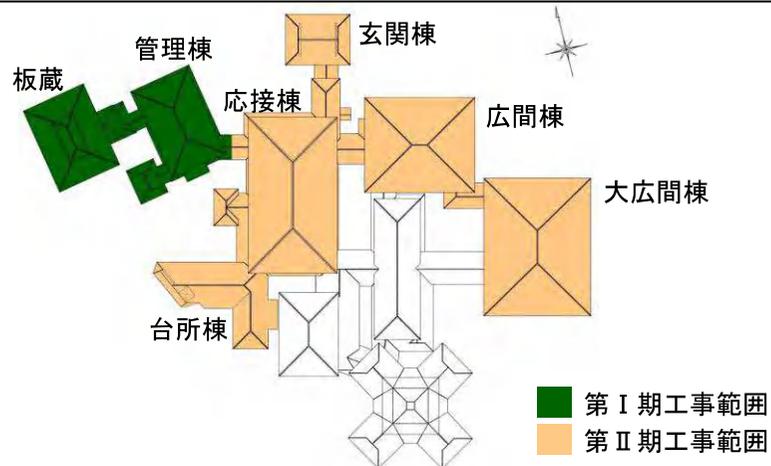
### 大広間棟

約104畳の大広間。トラス構造の屋根で、6畳の床の間を左右に構える。伝統的な書院造りになっている。



### 居間棟

松、竹、梅の間の3部屋が連続して並び数寄屋風の居室。居住部分として大きな浴室がある。



補助事業名	
重要文化財「古谿荘」玄関棟ほか8棟建造物保存修理事業	
事業期間	事業の組織
令和3年11月～令和13年3月(予定) 第Ⅰ期工事:令和4年3月～令和6年6月 第Ⅱ期工事:令和6年6月～令和11年9月(予定)	事業主 一般財団法人 野間文化財団 設計監理 公益財団法人 文化財建造物保存技術協会 工事請負 株式会社 魚津社寺工務店
工事範囲	
建物全9棟の工事を期間を分けて実施	
工事内容	
屋根葺き替え・部分解体修理工事、耐震工事、防災工事等	

## 国指定文化財建造物の修理について

国指定文化財建造物の修理は、一般的に「修復工事」と呼ばれますが、正確には、「保存修理工事」といい、「根本修理」と「維持管理修理」の2種類に大別されます。

根本修理は、建物を全解体または半解体（骨組は残す）して行う大規模な修理です。部材を全て（又は大半を）解体し柱の傾きや不陸を修正、破損部材の取り替えや補修を行って再度組み立てる工事で、周期は概ね200～300年を想定しています。

維持管理修理は、部分的な修理で、屋根の葺き替え、壁の補修、塗装の塗り直しなど数十年おきに実施されます。古谿荘の現在の工事はこちらに該当します。

## 伝統建築工匠の技

「木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が、令和2年(2020)12月にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

これは、自然素材を建築空間に生かす知恵、周期的な保存修理を見据えた材料の採取や再利用、健全な建築当初の部材とやむを得ず取り替える部材との調和や一体化を実現する高度な木工・屋根葺(ぶき)・左官・装飾・畳など、建築遺産とともに古代から途絶えることなく伝統を受け継ぎながら、工夫を重ねて発展してきた伝統建築技術です。

国の選定保存技術に選定されている17件の伝統建築技術により構成されています。

(文化庁「文化遺産オンライン」より)

# 古谿荘修理工事の流れ

## 1 建物の解体

解体は、壊すのではなく分解をしていくイメージです。明治時代から100年以上の歳月を経た古谿荘の、埃や煤煙で汚れた木材一本一本、瓦一枚一枚を丁寧に清掃し、取り外します。部材一つ一つに番号を付け、元の位置に組み戻せるよう慎重に進めます。



▲応接棟の瓦解体  
全ての瓦に番号を付けて解体

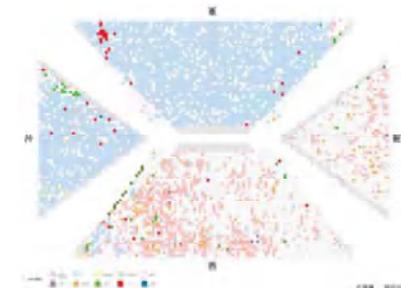
## 2 調査と記録

解体と同時に各部材の調査も行います。建設当初のものがどうか判断、他にも材種、加工方法、仕様、破損状況、痕跡などを調査しています。これにより、竣工以降の修理や改修の履歴が明らかになり、さらに、建築に携わった大工や左官などの職人の技や性格、設計者の思いまで読み解くことにも繋がります。こうした調査は建物を解体するタイミングでなければ行うことができず、古谿荘の文化財的価値を高める上で大変重要な役割を持っています。



▲応接棟の瓦解体後の調査  
全ての瓦の破損、製造元、時代を調査

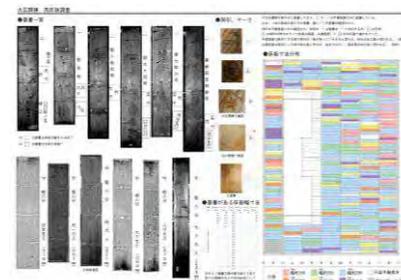
文化財建造物は部材の一つ一つが文化財です。傷んでいるからといって安易に古い部材を取り替えることは建物の文化財的価値を損ねることに直結します。現場では古い部材をどこまで残すことができ、どこまで手を加えるかを常に考えながら作業をしています。



▲応接棟全面瓦調査  
刻印の分布で傾向を分析

## 3 修理 ～匠の技～

修理工事では高度な技術が必要です。工事では、現代の電気工具だけでなく、鑿(のみ)、鉋(かんな)、手斧(ちょうな)なども使用して修復作業を行います。文化財の価値を損なうことなく修理を行うためには、形状だけではなく技法も再現する必要があります。



▲大広間棟床板調査  
墨書から製材や輸送の過程を考察

完成

# 古谿荘 修理工事内容

## 〈大工工事〉

シロアリ被害が大きかったため、詳細な調査を実施し、健全部は活かしつつ、埋木(うめき)・矧木(はぎき)・継木(つぎき)による必要最小限の修理を行います。



桁の腐朽部分の継木補修



土台の矧木補修

## 〈屋根工事〉

修理前の姿にならない、瓦葺は下葺に杉皮を使用し、古い瓦を選別・清掃して再利用します。鉄板葺・スレート葺は当初のこけら葺を残したまま葺き替えます。



瓦葺



耐震棟の設置

## 〈左官工事〉

壁の塗り方を調査し、大津壁(おおつかべ)・櫛引漆喰(くしびきしっくい)・聚楽壁(じゅらくかべ)を当時の工程どおりに復旧します。必要部位のみ補修しています。



大津壁



櫛引漆喰

## 〈耐震補強工事〉

小屋裏・床下・壁面など見えない部位に補強を行い、外観を損なわず伝統意匠と調和させながら耐震性を高めます。



合板補強壁



床下補強梁

# 古谿荘 第Ⅰ期工事対象建造物

## 管理棟



### 特徴

管理棟の特徴は、現在は少なくなった麻の茎を乾燥させて作られた苧殻が外壁や軒裏に使用されていることです。また、土壁には櫛引漆喰と呼ばれる漆喰壁が施されており、この漆喰が乾く前に櫛を使って等間隔に筋をつける技法が用いられています。この技法は高度な技術が必要であるとされています。



苧殻



櫛引漆喰

## 板蔵



### 特徴

板蔵の特徴は、外部が全面鉄板で覆われその上にコータールで塗装された、真っ黒な蔵であることです。内部の壁は全体が漆喰塗りです。屋根はトラス構造なので3階には広々とした大空間が広がっています。トラス構造とは、構成される三角形を単位とした構造骨組の一種で、大空間や橋を造る際に用いられています。



鉄板張り



トラス構造

## 解体してわかったこと

### 三種類の屋根が重なっていた

管理棟玄関の瓦棒鉄板葺(かわらぼうてっばんぶき)の金属屋根を解体していくと、下から富士型ともとれる台形の板金屋根が現れました。さらに、その板金屋根を解体すると、栗の木の板を細かく重ねたこけら葺が現れました。このように、屋根の形状が何度も環境に合わせて変更されたことがわかりました。今回の修理工事では、文化財指定時の姿(瓦棒鉄板葺)に戻すことに決定しました。



瓦棒鉄板葺

台形型鉄板葺

こけら葺



こけら葺 修理前



こけら葺 修理後

瓦棒鉄板葺

台形型鉄板葺

こけら葺

## 台所棟



### 特徴

台所棟は、食事の準備や提供を担う場所で、炊事場や動力式の井戸、外には生簀(いけす)として利用された溜池が設けられていました。奥には使用人の居室や風呂場があり、当時の生活の様子を伝えています。建物の奥には煙突付きのボイラー設備を備え、各所に給湯できるという当時としては大変先進的な仕組みも整えられていました。建築面積は約33坪。屋根は現在瓦棒鉄板葺ですが、解体調査により、かつてはこけら葺や鉄板平葺であった時期も確認されています。



(修理前)

支度座敷に土間の炊事場を備え、奥に居室と風呂場を配して生活と接客空間を結んでいます。



(修理前)

ベルト式の動力で汲み上げる井戸があり、石製の井戸枠には小石を表面に見せた洗い出し仕上げが施されています。



(修理前)

レンガ造りのかまどがあり、炊事用のほかボイラー的な機能を持っていたと考えられます。



(修理中)

現在は基部だけが残っていますが、かつては高い煙突が立ち上がり排煙を担っていました。

## 応接棟



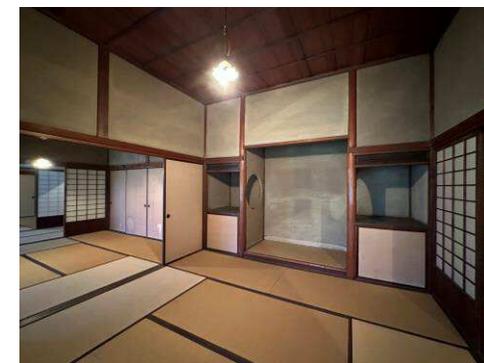
### 特徴

応接棟は、玄関からつながる東側の接客ゾーンと、台所棟や配膳室へとつながる西側のサービスゾーンの二つの機能を備えた建物です。東側には、異なる意匠の床の間をもつ3室と、押入を備えた次の間が2室並び、少人数の接客や大広間での宴会における控室として利用されていました。外壁には、苧殻張りや櫛引漆喰などが使われ、細部にまで工夫が凝らされています。



(修理前)

西側のサービスゾーンは、廊下が板敷になっています。



(修理前)

趣の異なる床の間を備えた部屋が、3室並んでいます。



(修理前)

北側の電気室には、ドイツ製分電盤が当時の姿のまま残っています。



(修理中)

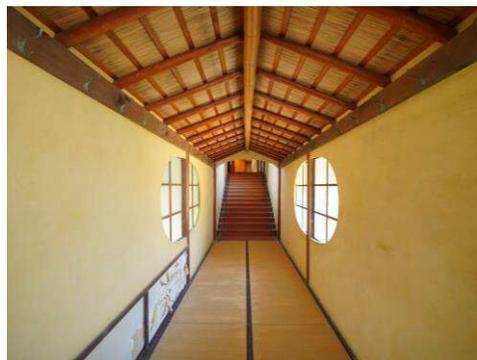
屋根の構造はトラス形式と和小屋形式のハイブリッド構造になっています。

# 玄関棟



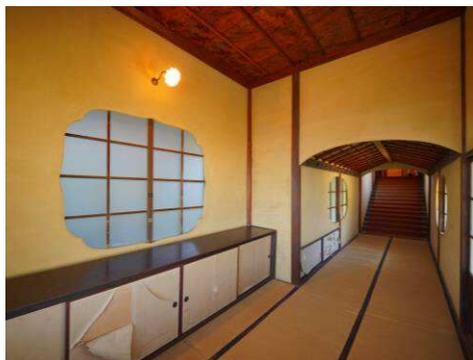
## 特徴

玄関棟は、軒の高い車寄せと6畳の玄関から成り、檜(けやき)の一枚板でつくられた階段によって応接棟とつながっています。天井には美しい玉杓(たまもく)模様の杉板が使われ、廊下部分は苧殻張りの舟底天井で仕上げられています。軸部には、棟木に竹、垂木に檜(ひのき)の丸太、柱には6寸の杉丸太が用いられ、来賓客を迎えるにふさわしい優美な造りとなっています。屋根は現在スレート葺ですが、もともとはこけら葺であった痕跡も残されており、建物の歴史を物語っています。



(修理前)

応接棟につながる舟底天井の廊下には、コート掛けのフックがあり、機能と意匠を両立させています。



(修理前)

玄関部分は、6畳で火灯窓(かとうまど)や高い化粧天井が空間を立ち上げ、来賓客を静かに迎え入れます。



(修理前)

車寄部分には、アーク電灯と檜引漆喰の壁が施してあります。



(修理前)

軒裏と腰壁には、全面に苧殻の簀の子が張ってあります。

# 広間棟



## 特徴

広間棟は、北側の縁側から富士山を望むことができることから「富士見の間」と呼ばれています。8畳の部屋が4室、田の字型に配置され、その周囲を幅一間の廊下が取り囲む構成となっています。これにより、他の建物から独立した落ち着いた空間が生まれています。内部には左右対称に設けられた二つの床の間をはじめ、上質な柱や柱目(まさめ)の長押(ながし)、麻の葉模様の欄間格子(らんまごうし)など、細部にまでこだわり抜かれた意匠が見どころです。



(修理前)

3畳で一つの床置に違い棚をまとめ、襖の向こうに対となる床の間を配し、意匠のバランスを保っています。



(修理前)

田の字型に和室を配し、長押内に通した照明で壁面をやわらかく照らしています。



(修理前)

麻の葉模様の欄間格子と全面壁紙仕上げにより、光をやわらかく返すことで華やかな空間にしています。



(修理前)

幅一間の畳廊下が和室を囲み、障子の柔光と欄間の陰影が、空間の連続性を際立たせます。

# 大広間棟



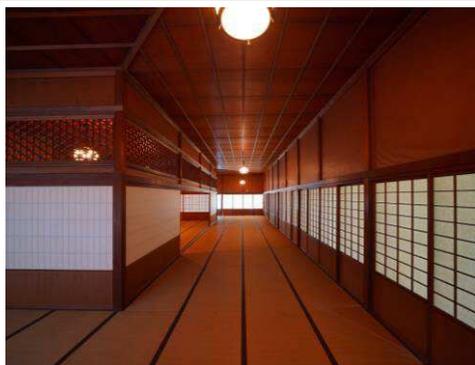
## 特徴

大広間棟は、古谿荘の中心をなす格式ある接客空間です。欄間や障子、幅広の竿縁天井(さおぶちてんじょう)など洗練された意匠が施され、質素な佇まいの中にひっそりと豪華さが漂います。天井を高くしつつ柱や長押を細くすることで繊細で上品な印象を見る者に与え、さらにトラス構造により柱を減らして広がりのある空間としています。構成は32畳の大座敷を中心に、火灯窓付きの袋棚や付書院(つけしょいん)を備えた床の間が左右対称に置かれ、大座敷の周囲を畳敷きの入側と廊下が巡ります。建築面積は約70坪で、長さ6間の檜の長押や幅9尺の障子など希少な材を随所に使用しています。中でも6畳分を一枚で仕立てた大畳は国内最大級の規模を誇ります。



(修理前)

違い棚と火灯窓を中心に、左右対称の床を設けた構成が、均整の美と風格を伝えています。



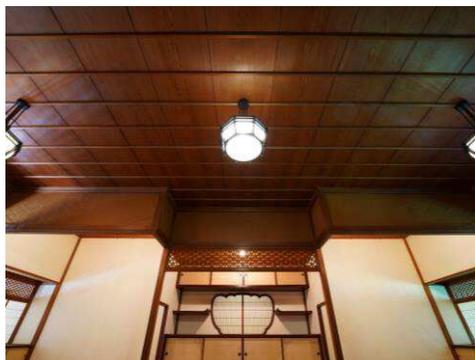
(修理前)

大座敷の周囲を二間幅の畳敷入側が巡り障子光が奥行きを生み出しています。



(修理前)

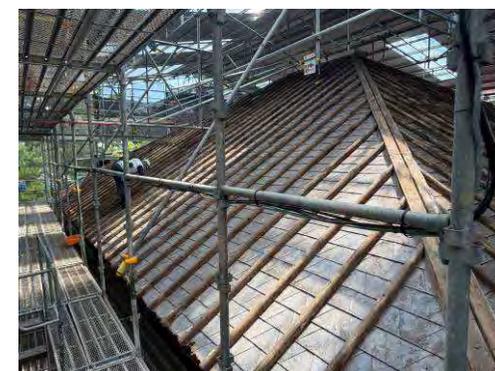
6畳一枚の大畳の下ではシロアリの被害が進んでおり、床材の保存修理が必要となっていました。



(修理前)

幅80cmの杉板天井から吊り下げられた電燈は、ガラスシェードに絹を貼り、光をやわらかく拡散しています。

## 修理工事の状況



各棟で屋根の解体が進んでいます。広間棟では現状の瓦棒鉄板葺を外すと、管理棟玄関と同じ台形型鉄板葺が現れました。

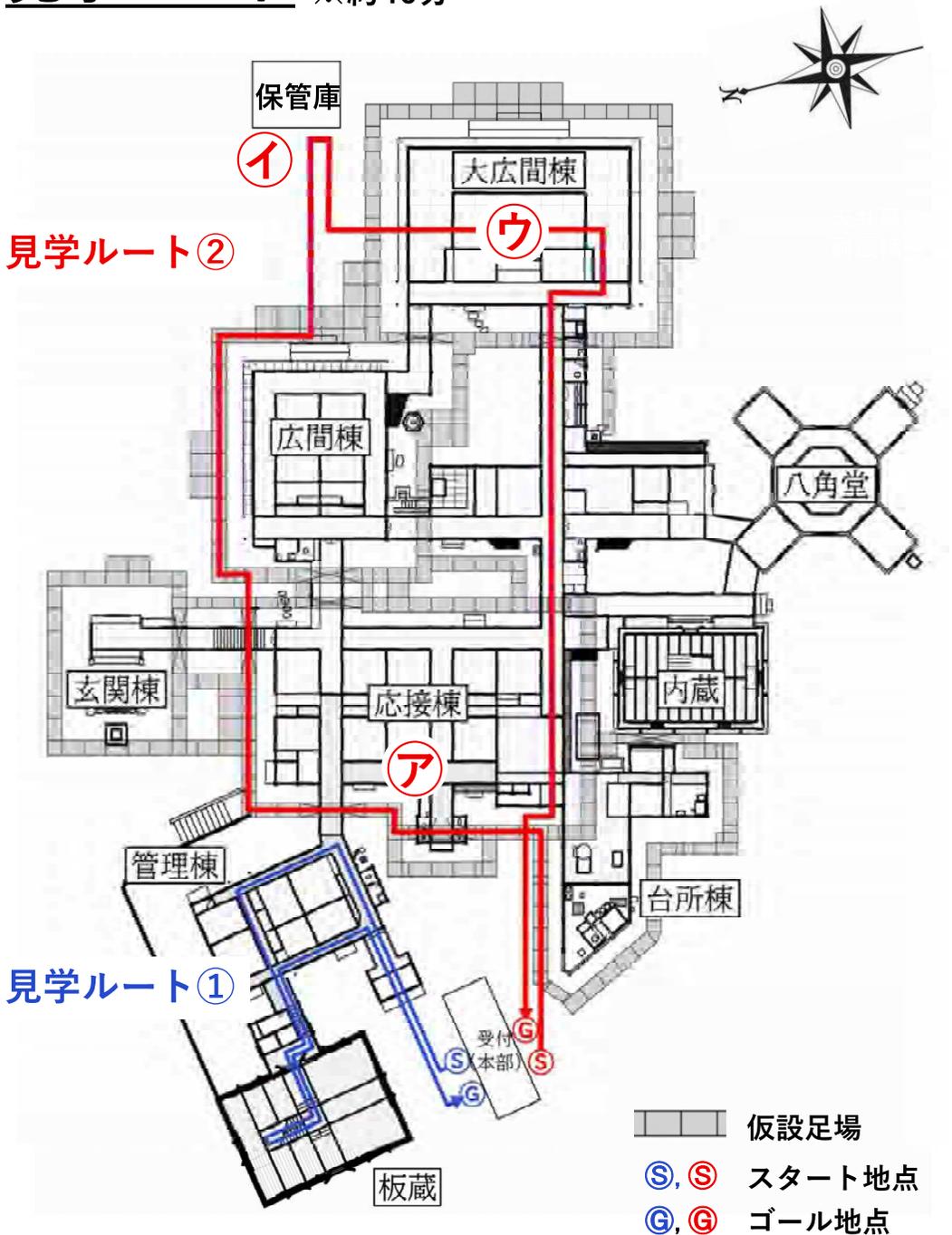


台所棟の屋根は、当初こけら葺と考えられていましたが、解体を進めると鉄板葺の痕跡が確認され、さらに野地板を外すと増築の跡が現れました。



内部では壁紙を層ごとにめくり、解体調査を行っています。また6畳一枚の畳を保管庫に移動し、床の間の解体を進めました。

# 見学ルート ※約40分



※本見学ルートは、ガイドによる説明付きです

## 見学ルート① 第Ⅰ期工事範囲ゾーン

### 【見学する建物】

管理棟、板蔵（見学順）

### 【見学所要時間】

約15分

### 【見どころ】

修理完了後の内部

## 見学ルート② 第Ⅱ期工事範囲ゾーン

### 【見学する建物】

台所棟、応接棟、玄関棟、広間棟、大広間棟（見学順）

### 【見学所要時間】

約25分

### 【見どころ】

ア 足場上からの屋根の全景 ① 大畳 ㊦ 深い床下

### ■ 受付（本部）

受付では、ヘルメット、軍手、スリッパをお貸しいたします。  
簡易休憩場所にもなっています。

### ■ 注意事項

写真撮影は不可となっております。

荷物のお預かりはできません。

見学する建物内の御手洗いは使用できません。